

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

平成 28 年 9 月 24 日	
所属部局・職	霊長類研究所・修士課程学生
氏名	武 真祈子

1. 派遣国・場所 (〇〇国、〇〇地域)
ブラジル、アマゾナス州、マナウス市
2. 研究課題名 (〇〇の調査、および〇〇での実験)
アマゾンの孤立林に「共存」する 3 種のサルの採食生態
3. 派遣期間 (本邦出発から帰国まで)
平成 28 年 1 月 29 日 ~ 平成 28 年 6 月 29 日 (152 日間)
4. 主な受入機関及び受入研究者 (〇〇大学〇〇研究所、〇〇博士/〇〇動物園、キュレーター、〇〇氏)
国立アマゾン研究所, Wilson Spironello 博士
5. 所期の目的の遂行状況及び成果 (研究内容、調査等実施の状況とその成果：長さ自由)
写真(必ず1枚以上挿入すること。広報資料のため公開可のもの)の説明は、個々の写真の直下に入れること。 別途、英語の報告書を作成すること。これは簡約版で短くてけっこうです。
<研究の概要> アマゾンというと、どこまでも続く熱帯雨林や雄大なアマゾン川など、野生の王国というイメージが強い。だが、報告者が対象としているのは、都市の中にぽつんと残された小さな森に生きるサルたちである。国立アマゾン研究所(INPA)のキャンパスには、2科3種の新世界ザル(フタイロタマリン、コモニスザル、キングオオサキ)が生息している。これらのサルは、生息地を追われるなどの理由で人為的に導入されたサルたちである。報告者は、狭い孤立林の中で、限られた資源をサルたちがどのように利用し、共存・競争しているのかを、特に食物資源に着目して調べることを目的とした。また、三種のサルの種子散布者としての役割の違いを明らかにすることも目的とした。 また本研究は、幸島司郎先生(野生動物研究センター)が率いるフィールドミュージアム・プロジェクトに所属している。最終的な目標は、プロジェクトの目的である都市周辺の生物多様性保全や、都市住民を対象とした環境教育に貢献することである。
<今回の渡航目的> 修士課程で必要なデータを収集すること。当初予定していた調査内容は以下のとおりである。 1) 3種のサルそれぞれの追跡・行動観察 2) 植物のフェノロジー調査 3) サルの糞中種子の発芽実験 4) 二次散布者による糞中種子持ち去りの観察 5) サルが利用する果樹の定点観察
<目的の達成状況> 実際にフィールドに出てみると、サルの糞を収集するのが予想以上に難しいということがわかった。サル自体が小さく見えづらいことや、太い枝の上で休んでいる時に糞をすることが多い(地上に糞が落ちてこない)ことなどが理由である。よって、糞分析が不可欠な種子散布能の比較は、十分なデータが集まらないことが予測されたため、今回の調査項目から外した。また、報告者自身の知識不足・経験不足もあり植物のフェノロジー観察や果樹の定点観察まで行う余裕はなかった。そのため、1)に記したサルの追跡・行動観察だけを集中して行った。 しかしながら、滞在2ヶ月を過ぎた4月上旬ごろから心身の不調が続き、フィールドにあまり出られなかったため、得られたデータは断片的でわずかなものだった。結局、予定を2ヶ月早めて、6月末に一時帰国することになった。このような経緯もあり、今回の渡航は滞在日数が長かった割に目的の達成状況は低く、目に見える形の結果がほとんど得られなかったので残念であった。ただ、ひたすらサルを追い観察するというシンプルな手法であっても、続けることはとても大変だということ身をもって学ぶことができた点は、ひとつの成果と言えるかもしれない。
<平成 26 年 5 月 28 日制定版> 提出先: report@wildlife-science.org

「霊長類学・ワイルドライフサイエンス・リーディング大学院」による派遣研究者報告書

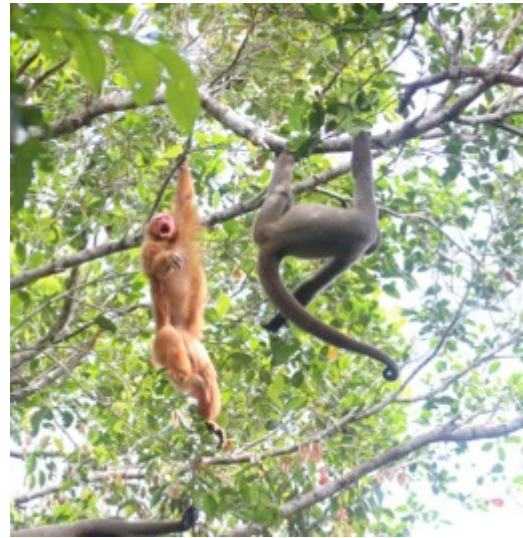
(当経費の支援を受けての出張後、必ずご提出ください)

<その他、滞在をふりかえって>

研究に関しては残念なことが多かったが、ブラジルでの生活は楽しいこともあった。おじさんがパンツードでバイクを走らせていたり、電気がつかなくなったり消えなくなったり（電気屋さんは電話し続けて5日目に来てくれた）、夜10時過ぎから始まる野外パーティーで夜通し踊ったり、日本では味わえないブラジルらしい生活は刺激的でおもしろかった。名前を名乗って握手を交わせばすぐに友達として受け入れてくれるブラジル人のおおらかさ、フレンドリーさはとても居心地良く感じた。

4月にはプロジェクトコーディネーターの松沢先生が訪ねて来てくださり、一緒に遠出をして、調査地にはいない新世界ザルたちに出会うことができたのも貴重な体験だった。サンパウロで日本企業や日本人留学生と交流する機会にも恵まれた。

だが、総じてみればやはりともしんどい5ヶ月間だった。自分の弱さとひたすら向き合う時間だった。助けてくださった先生方、フィールドミュージアム・プロジェクト関係者のみなさま、PWS 支援室のみなさま、家族友人たちに心から感謝したい。



左上：雨上がりに毛づくろいするキングオサキ 右上：ウアカリとウーリーモンキー (@アマゾンエコパーク)

左下：調査風景（カメラトラップの設置） 右下：熱帯雨林を背景に松沢教授との記念写真

6. その他（特記事項など）

渡航費、生活費の全面的なサポートをしてくださった PWS リーディングプログラム・コーディネーターの松沢哲郎先生、および PWS 支援室のみなさまに心から感謝申し上げます。